

心身相関と問主観性

龍谷大学教授 木村 敏

今日の私の題、「心身相関と問主観性」、問主観性というのは、簡単な言葉で言い換えてしまえば、自己関係と言いますか、「自己と他者」の関係です。心と身体の関係と自己と他者の関係、その二つの関係の関係をお話をすることになります。

精神病、その治療には心理療法とか精神療法が行われるわけですが、その一面で精神病というのは身体、特にこの場合は脳の病でもあるわけです。だから、我々は薬物療法も致します。それが精神的な不安定に役に立つ。もう一方で、精神病は対人関係の病である、自己と他者の関係の病である、これは非常にはつきりしていません。身体の病気でしたら一人で病気になることがあります。しかし、精神の病は、周りに人がいなければ、病として成り立たない。自殺ということがない限り、精神病で命を落とすことは原則的にございません。病気というものは本人が苦しい、あるいは放っておけば死ぬ、そういう時に医者が助ける。精神科の場合は、放っておいても死にはしない。本人はそんなに苦しくない場合が多い。これは単純に本人は苦しめないと言いつけるには、大きな問題がございますけれども。それをなぜ精神科の医者が治療するか、それはやはりその方が社会人としてその社会のなかでの人間関係、対人関係に適応できないからです。

精神病にもいろいろありますが、一番代表的な精神分裂病という病気をとってみますと、ほとんどの患者さんの発病が、十代後

半から二十代前半というところで出てきます。子供の世界から大人になる、社会人になるとき、自己をはつきりもたなければ社会人になれない、自己と他者の関係というものをもてない、その関係をもち損なった人が精神科の病気になります。また、精神分裂病の症状というのは、自分がみんなから迫害されているというような妄想を持つとか、全部、例外なくいつていいほど自己と他人の関係が病気の内容になります。精神病というのは自己関係の病気、やはり我々は主体的な行動をしなければ社会人として適応できないわけで、そういう主体であることの病、主体的になりにくい病ということがいえます。それで、我々が社会人として主体的であるというときに問題になるのは、我々の周りにいるたくさんの人たち、これがめいめい全部主体だということです。本人が自分が主体であることを、自覚している、いないにかかわらず、みんなが主体であり、主体的に行動し主観的のものを見ている。そのなかで自分の主観なり主体なりというものを確立しよう、これはなかなか大変なことです。それに失敗すると精神的な病におちいることになるわけです。

「問主観性」といいますのは「インターズブイエクテイヴィテート」というドイツ語の翻訳語ですが、「問主体性」と言ってもさしつかえない。「インター」と言うのは「問」です、「ズブイエク」というのは、「主体」になったり「主観」になったり日本語では二つの訳語をもった一つの言葉です。だから「問主体性」と言ってもさしつかえない。

さて、まず心と身体という問題の方から入ってみたいと思うのですが、デカルトが一応近代の心身二元論の始まりだとされております。実はそれもそう簡単にはいかないようですが、一応、心

は「考えるもの」、身体は「延長のあるもの」で、心と身体を二つの違った存在として分けたことはまちがいないですね。それで近代の哲学なり思想なりは、心身二元論といって心と身体をまったく別々に考える、そういう考えでやってきて、十九世紀ぐらゐから、それに対する非常に大きな批判が出てきて、実存思想、実存論的な考え方に発展してきました。

その二十世紀の実存思想の源泉になった二人の偉大な思想家がありまして、一人はキェルケゴール、一人はニーチェですが、この二人が心と身体ということについて、表面上まったく正反対のことを言っております。キェルケゴールは『死に至る病』という本が一番最初のところで、こんなことを書いています。「人間とは精神である。精神とは何か。精神とは自己である。自己とは何か。自己とは自己自身に關係する關係である。自己とは単なる關係ではなく、關係が自己自身に關係するということである。關係が關係それ自身に關係するような關係のことを自己という、これは大変深い思想だと思えます。このようにキェルケゴールは「人間とは精神である」と言います。それに対してニーチェの『ツアラトゥストラはこう語った』のなかにはこんなことが書いてあります。「私はどこまでも身体であつてそれ以外の何ものでもない。心とは身体の付属物にすぎない。精神というちっぽけな理性は身体という偉大な理性の道具であり、玩具である。君は私という言葉を誇りにしているが、身体は口では私と言わないで私を行為している。」

キェルケゴールの場合、人間とは精神である、精神は自己であるというところが、ニーチェは私は身体であるという。ニーチェは自分が人間の代表者みたいだに思つていたでしょうから、「人

間とは身体である」といいかえてもいいと思ひます。精神とか心なんてものは身体の付属物であり玩具に過ぎない。キェルケゴールは「精神とは自己である」と言うのですが、ニーチェは「自己が身体に住んで精神に命令している」と言ひます。まるで正反対のことをいつているんですね。キェルケゴールはキリスト教に非常に深い信仰心を持つていた人ですし、ニーチェはキリスト教に対する反逆児ですから、大いにそういうことも關係があるのでしよう。しかし、二人とも人間の主体的な実存ということを上なく深く考え、その二人の影響で二十世紀の実存哲学とか実存思想、実存主義は成立してきたことはいうまでもないわけです。それで一見ここに見られる矛盾は、私はこれは両方とも真実をいつていると思うので、なぜ両方とも真実であるのかということをし考えてみたいように思ひます。そのために、従来からの認識を貴ぶ西洋哲学というものを少し離れて、それとは違つた見方で考えてみたらどうだろうかと思ひわけです。

私は精神科の医者です。精神科の医者というのは、ただ机の前に座つて抽象的に哲学的な問題を思索をしているだけでは自分の仕事ができない。診察室で患者さんと時には本当に格闘するといふような形で交わりあわなくてはならない。その場合、患者といふのは自分が主体であろうとして失敗している人ですから、主体であろうとすることを必死になつて求めている人です。その人達を受けとめて、その場合に医者も主体的に、一個の主体として患者さんに接しなければ、つまりそこで非常に充実した問主体性といふようなものができあがらなければ、精神科の診察、治療といふのは成立しません。そういう行為、実践の現場でこういう問題を捉えていかねばならないと思つております。これは本当にやは

り宗教の信仰とどこか非常に似たところ、つながるところがあるような気がいたします。

私が最近非常に熱心に勉強しているドイツの医学者で、ヴァイクトール・フォン・ヴァイツゼッカーという人がおります。この人が「主体」ということについて、非常にももしろい思想を臨床的な実践のなかから出してきているので、このことを少しお話しをしてこの問題をつなげていきたいと思えます。

その前に、さつき「主体」とか「主観」とかいうことを申しましたが、元来「主体」とか「主観」とか我々がいつている元のギリシャ語の意味は、向こう側にある、我々が認識するときの認識対象なんです。その使い方は例えば、英語とかフランス語なんかでは「サブジェクト」という言葉は、何か自分が取り扱う問題の主題のようなものです。フランス語で特にそうなんですけど、患者さんのことをフランス語で「シュジュエ」といいますが、これは決して主体という意味ではありません。むしろ対象という意味です。これがドイツ哲学へ入ってきて、「ズブイエクト」というドイツ語になりました、カント以後ドイツ観念論では認識の一番基本になる原理ということになりました。だからこれは認識するものである我々の心の方に持ち込まれたわけです。カントの場合、我々の側に一定の準備があつてそれで世界を見るから、世界がかくかくしかじかに見えてくる、その認識を準備しているような、先験的な原理のようなものが人間には備わっている、それを「ズブイエクト」と言ったんです。それを「主観」と訳したわけです。ものを見る主人公という意味でしょう。ところが同じこの「ズブイエクト」という言葉がその後、先程いきましたキェルケゴール、

ニーチエあるいはマルクスなんか関係があるんだろうと思えますが、そのあたりから、それまでのものを見る、認識するという立場から実践的な行為の立場になって、それと同時に実践行為の主人公、これはあくまで人間ですね、この主人公が「ズブイエクト」といわれることになった。そうすると、これも「主観」と訳すのは具合が悪い。そのころから、これは「主体」と訳されるようになってきたんです。日本人が勝手に二通りの訳を考えているだけで元来は同じ言葉なんです。ドイツ人は「ズブイエクト」というときに文脈によって主観ということもあるでしょうけれども、主体といった意味あいでもなく、日本では例えば西田幾多郎は新カント学派というドイツ観念論から出発いたしましたから、最初の方は徹底的にその「主観」ということで書いているんです。ところが、その途中で西田先生のお弟子さんたち、例えば田辺元とか西谷啓治とかの方々が「主体」という言葉を使いはじめた。西谷啓治の非常に有名な「根源的主体性の哲学」という本の頃から、西田幾多郎には、「主体」という言葉がちらほら出てくるようになりまして、後期の西田哲学には、かなり頻繁に「主体」という言葉が出てまいります。そんなことで「主観」と「主体」というのは元来一つのことなんです。

ところで、ヴァイツゼッカーは少し変わった「主体」の捉え方をいたします。普通の使い方では主観にしても主体にしても私の主観、私の主体であつて、みなさんがた一人一人が主観を持って主体的に行動しているわけで、そういう意味では各自が主体であり主観なんです。しかし、ヴァイツゼッカーという人は人間を生き物として捉えるわけです。我々は、特にヨーロッパのキリス

ト教の伝統では、人間と動物との間に、あるいは植物も含めて他の生き物との間に、非常にはつきりした線を引きます。東洋の思想、仏教的な思想では、人間とそれ以外の生き物との間にそんなにはつきり線は引かないですね。だから、我々にとつては、人間は生き物であるといわれた時には全然抵抗なく受け入れられるけれども、西洋の考え方としては、かなり破格の考えだと思ふんです。人間は言葉をししゃべり、自己意識を持ち、そういう点で動物と違いますけど、根本は一緒じゃないかというのがヴァイツェッカーの考えで、だから人間だけじゃなくてどんな生き物も「主体的」に行動しているという考えです。その場合の「主体的」とは、生き物がありますと——これは人間である必要は全くない、場合によっては植物であつてもいいですし、アメーバであつてもいいのですが、——その周りに環境があります。その生き物の内部も環境も、刻々絶えず変化を続けて行く。そのなかで生き物は生き続けなければいけない、自分の生命というものを維持する、それが生き物にとつても究極的な存在の目的になります。生きていくとは、環境との接触面、環境はもちろん生き物全部を囲んでいるわけだから、生き物の周り全部ということになるのですが、そのような環境との接触面で、生き物は環境との関係がとぎれてしまわないように生きて行く必要がある。ヴァイツェッカーは「相即」という言葉を使いましたが、この相即関係、環境と生き物との相即関係を維持していく。相即関係というのは決して不変のものではない、絶えずできあがっては壊れ、できあがっては壊れるということを繰り返すものなんです、そうやって生々消滅を繰り返す相即関係を絶えず維持していることが、生き物が生きていくことになるわけです。その生き物が生きていくときに、その環

境との境界面で働いている、つまり生き物を生かし続けている原理のことを、ヴァイツェッカーは「主体」といつている。大変珍しい革新的な主体概念です。

しかし、考えてみると、生き物が生きていく場合、その一番基本になるのは何かというと、環境との境目のところで相即関係を維持するということが基本になるわけです。それを「主体」と呼んで何の不思議もないわけです。主体、ズブイエクトというのは元来ギリシャ語の「ヒポケイメノン」、基本的なもの、ということばの訳語だったわけですから。

ヴァイツェッカーの「主体」というのはそういうことです。それを人間にあてはめるとどうなるか。その場合ヴァイツェッカー自身は言っていないんですけれども、私の考えを申しますと、人間とは哺乳類の一種ですね。あるいは霊長類の一種ですね。哺乳類とか霊長類とかのなかには、群れをつくって集団生活をして自分を維持している動物が多いですね。哺乳類だけじゃなく蜜蜂であるとか、蟻であるとか、あるいは渡り鳥とか、あるいは魚の群れもみなそうですが、人間もそうです。元来は群居動物です。そういう動物の群れを観察していると、一つの群れ全体が、どうも一つの主体的行動をしているように思えてしょうがない。そのなかの個々も、もちろんそれなりに主体的な行動をしているんだらうと思います。その場合の主体的というのはヴァイツェッカー的な意味です。しかし、そのなかにたくさん個体のある群れ全体にも、その環境があるはずなんです。その環境との接触面、群れの場合、どこに接触面があるかは難しいんですが、やはり環境との間で相即関係を維持している、これを群れの主体性あるいは集団的主体性と言つてもよいだらうと思います。個々の個体は、

もちろん全部同じ行動はしませんから、はぐれて後で追いかけてくるものもありますが、それなりの主体的な行動をしているわけです。いつもその集団全体の主体的な行動とそれを構成している個体の主体的な行動とが、非常に複雑に絡み合っているように思えます。人間の場合でも、それと全く同じことが言えるように思うんですね。人間もそのときそのときの周囲にいる人たちと集団をつくる。元来は部族とか集団というのは、かなりきまつた集団をつくっていたんでしようが、我々文明人になつてくると、例えば学校ではクラスであるとか家へ帰れば家族であるとか、いろんな場面に応じてその集団は変わると思うんです。そのときに作っている集団が何か一つのまとまつた主体的行動を人間でも示している。それが一番はっきり読み取れるのは、例えばラグビーとかサッカーとかの集団スポーツみたいなものを考えますと、チームが一つの主体的行動を示すというのがよくわかりだろうと思います。

ところが、進化論的にいつの時点かわかりませんが、ホモ・サピエンスとかカタカナでヒトと書いたりするような、非常に奇妙な霊長類があらわれたわけですね。大きな特徴は何かということと自己意識ということ、自分を意識しているということですね。おそらくそれと同じことだと思ふんですけど、言語というものを我々は獲得しました。チンパンジーなんかは、もう少しのところまで自己意識とか言語機能をもつ、その境目にいるということになります。自己意識と言語機能というのは両方とも、人間のほとんどの人で左側にある大脳優位半球のはたらきだろうと思います。それが、いろんな動物のなかで人間だけきわめて発達しているわけですね。脳の左右の分業が行われている。これと関係があることは間違いない。こういう自己意識というものを人間がいったん取得

しますと、人間はほかの生物と同じように集団的な主体性と個別的な主体性の絡み合いで行動しているにも関わらず、何か集団的な主体性をいわば意識から抑圧してしまう、忘れてしまうんです。自分の主体性で行動しているんだという錯覚を持つ、それが人間独特の錯覚だろうと思うんです。他の動物にはそういう錯覚はおきないだろうと思うんです。

言語も人間特有の能力です。このごろ言語学がかなり大はやりで皆さんの中にも言語学の本を読んだ方も多と思うんですけど、ソシュールだとかチョムスキーだとか有名な人がたくさんいます。どうも現代の言語学は、認識本意の言語学になりすぎていてという疑問を私はもっているんです。この頃あまりいわれなくなつたことだけれども、言語機能の非常に大きな働きのとして、現在目の前にないもの、報告するというのがあります。例えば昨日のことを今日語る、昨日のことは現実にあつたわけですけど、いま現在はない。あるいはおそらく昔の原始的な集団では、敵が攻めてくる、見張りを出して、見張りが戻ってきてどこそこに敵がきたということを使ったのかもしれないですね。言葉というものはいま目の前にないことを他人に語ることでできる機能をもっている。それで我々は現在、直接の現在の拘束から解放されて、過去と未来に生きることができるようになります。

要するに歴史性というものの、あるいは歴史意識といつてもいい。言語と、過去の記憶や未来の予想とは思ひのほかに関係が深いのです。我々は生まれてから一年、二年の間のことは覚えていないですね。物心がつくまでのことはまず覚えていない。覚えていない時というのはまだ言葉が充分自分のものになつていなかった時ではないだろうか、私はそう思っています。我々が言葉をかかなり自由

に使えるようになってからのことは、原則として、記憶が残りますと思います。我々にとつて歴史性というのは言語機能と関係があるだろうと思います。そして歴史性ができると、そこから自分というものが唯一性といえますか、他人と交換不可能である、一回性、アインマリーッヒカイトというドイツ語を使う人もいますが、例えば一卵性双生児というまったく遺伝的には同じ人物です。しかし、本人同志は、むしろ普通の人以上に、自分の兄弟に対する対抗意識、自我意識が強い。これは、生まれて以来現在に至るまでの歴史が違うからです。我々が他人と違う、私は私だということがはつきりいえるのは、自分がこれまでたどってきた歴史が違うということだけですね、その根拠になるのは、歴史ということを我々が意識できるようになってから、自己の唯一性ということが意識できるようになったと思います。言語機能みたいなものの働きの一番根底にあるんじゃないかと思っています。

このような歴史意識を人間が持った結果、さつきもいいましたように集合的な主体性を自己意識というもので覆い隠してしまつて、そこへ唯一無二の他人と絶対交換できない自己というものがかぶせてしまいました。それで、個人個人の主体性ということが、実存的なものとして非常に責られるようになってくる。もちろん人間ですから責ぶのは当然です、我々医者としても、患者さんは普通に自己意識をもつた人間ですから、それに対応しなければいけないわけですが、それはあくまで表面現象であつて、その奥を探ってみるとそこには集団的な主体性というものを無視することは絶対できない。例えば、お母さんは自分の赤ちゃんがけがをしたときに、その痛みを自分の身体ではなくて赤ちゃんの身体のところを感じる、実際そういうことがあるんです。メルロ・ポ

ンティという哲学者は「間身体性」という言葉を使うわけですね、身体と身体の間でおこることがある。間身体性なんというの、まさにその場合はお母さんと子供の間の二人だけでですけど、その集合的な主体性を考えなければ理解できないことだと思っています。

「間主観性」という言葉はどうやってでてきたかといいますが、カント以来のドイツ観念論の哲学が、主体あるいは主観というものを、あくまで各自に備わった内在する原理として追求してきたのに対して、前世紀末から今世紀の頭の頃に、フッサールというドイツの哲学者が大勢の複数の主観が一致してあるひとつの意味を、現象学では「志向性」という言葉を使うんですけど、志向性を共有するということがある、と言い出して「間主観性」という言葉を作ったわけです。これはフッサールの功績なんですけど、彼はあくまで認識論の立場でしたから、間主観性というのは、結局は多数主観の共通の認識の根拠としてしか提出されなかった。例えば赤なら赤という色で、自分が考えている赤が他の人が考えている赤と同じなのかどうか、ちょっと考えてみると疑問です。不安にもなります。赤に限らず何事でもそうでしょう。みんな同じものと同じように見えているらしい、ということはおわかりますが証拠も何も無い。もしそれが成り立たなければ科学の客観性なんていうのは成立しない。そういう科学の客観性というものを保証するような、たくさんの方が同じことを考えたり見たり聞いたりしているとその構造が、フッサールのいつている間主観性なんです。

フッサールの場合、あくまで認識の立場で語っているので「間主観性」という訳語でよかったです、それを認識の立場を離

れて実践行為というようなことで語るときには、「間主観性」という訳語は使いにくい。「間主観性」といった方がいいでしょう。しかし、間主観性という言葉はまだあまり一般ではない。「相互主体性」という言い方ならあるのかもしれない。

これに対して、お母さんと子供の間で痛みを共有している「間身体性」ということをメルロ・ポンティはいうわけです。これは決して客観性の保証とは違うんです。例えば恋人どうしが二人だけの世界を作っている場合を考えてください。他の第三者は絶対にそこへ割って入ることができない。ところが二人は非常に堅く密な主観性なり主体性なりを共有している。もちろんそれは間主観性のもつとも凝縮されたものだろうと思うんです。これとさっき言った客観性の基礎になるような間主観性とは質が違うと思うんです。その質をどう表現したらいいのかいろいろと考えているんですけども、片方が公共的な間主観性であるとすれば、片方は私的な間主観性と言えば大体いえるんじゃないかという気がしています。

公共的な間主観性は無限に開かれています。だれでもそこに参加できる。例えば赤という色が本当に赤だという認識は、原則的にだれにでも無限に開かれていますね。言葉の間主観性もそうです。日本人であれば日本語というのは、もちろん概念が難しく理解できない場合もあるでしょうけど、原則的には誰でも参加できる。それに対して私的な間主観性の方は、そうはいかない。原則として第三者の介入を拒むところがあります。

この間主観性の応用問題の一つとして、他我経験、他我知覚という問題があります。これはフッサールにとつても大問題でした。つまり、目の前に人間の形をした物体を見たときに、それぞれが

心を持ち、自我を持った人間であることがどうしてわかるのかという問題なんですね。マネキンやロボットではない生きた人間だというのがどうしてわかるのか、というのがフッサールにとつて大きな問題でした。フッサールがいうには、我々はまず物体を、精巧な人のかたちそっくりの物体を知覚する。それと自分の身体というものを照らし合わせて、表情であるとか動作を全部つき合わせて、それが私の身体と同じ人体だということを確認したうえで、次に自己移入というのをして、自分をそっちへ移しこんで、それで相手が自分と同じように主観をもっているということがわかるんだというわけです。これはちょっとお粗末だと思います。

しかし、これは考えてみると奇妙な問題なんです。例えば、どんな動物でも自分と同じ種類の動物には関心を向けて、種類が違えば関心をあまり向けないということがあります。動物にとつて本能的にそうでなければ、つがって繁殖するというようなことはできないわけだし、集団をつくって敵から身を守るということもできないわけで、非常に困るわけでしょう。自分と種類の動物を判別することができなければ、他我認知というのも結局それにつきて思うんです。人間が本能的に人間を同種の動物だと見分けて識別しているだけのことだと思ふ。もちろん間違いは起こりうる。それは当たり前なんですけども、根本的には、私は他我経験というの、哲学問題としては成り立たないんじゃないだろうかと考えています。それはその目の前にある人物らしきものが、ロボットであつたら自分との間に結ばれないであらうような、なんらか一つの共通性みたいなものが、相手が人間である時には結ばれるということです。私はどうもそれが私的間主観性というものの萌芽になるものではないだろうかと思っています。それが凝縮

された時に私的間主観性となって現れる、そこまでは行かないけれど、何かその非常にまだ薄い萌芽のようなものが、他人との間には通じているように思います。それは公共的な間主観性とはまったく違うように思います。

このお話は心と身体ということで始めたんですけども、心身相関というのは早い話が我々の個人の個別的な主体性と集団の主体性、あるいは我々はその都度その都度違った集団に所属いたしますけど、そういう集団のすべてに通じるような人間という種の主体性と通じるところがどうもあるんじゃないか。「種の主体性」というのは、今西錦司の言葉で、今西進化論の中心概念ですけど、これは非常に深いところをみておられたように思うんです。個の主体性と種の主体性、その個の主体性と種の主体性の関係と心身問題というのは切り離せない。このところをうまくばつと一言で、個の主体性と種の主体性の関係は心身問題そのものだということを言えるといいんですけど、なかなか難しいです。

私としてはこの個の主体性と種の主体性の関係は間主観性の問題でもあるし、間主観性の問題というのと心身相関は一つの問題だということを、今日一番始めに申し上げた。精神医学ではその間主観性、あるいは個の主体性と種の主体性の関係ですね。それが侵されると同時に心と身体の関係が侵される。この二つの侵され方というのは二つのことが同時に起こっているのじゃなくて同じ一つのことであろうと思います。これは医者として患者をみていて、そうでなければならぬはずだという直観みたいなものとして感じているんです。

もう一ついいますと、さきほど、歴史意識をもつようになってから、我々人間は自己意識というか自己の唯一性というものを意

識するようになったということを申しました。それは突き詰めて申しますと、死という問題につながってきます。死というのは絶対人に代わつてもらえないわけです。自分が犠牲的に代わつてあげるといふことはできるかもしれないんだけど、自分の死は自分自身が死ぬ以外ないわけでしょう。死というのは絶対に変換不可能な唯一私自身のものですよね。それに対して生命というのは非常に連帯的な生命一般ということでつながっている。この生命のつながりというのが、集団的な、種的な主体性ということの基本にあると思うんですが、さらにいうと、これはもはや人という種を超えて、生きとし生けるものすべてに広がることかもしれない。虫けらをも我々はそのに生命的連帯感を感じるということがありうるわけでありまして、非常に広いものだと思いますけど、死は絶対連帯できない。心と身体の問題は、個の主体、種の主体というこの関係と同時に生と死の関係ともどこかで深くつながっていることにちがいません。

だから、私はこれをどうつながっているのかを、分けて説明することは到底できないんですけど、これはみなさんでお考えくださいといたいと思います。宗教の根本問題だろうと思うんです。医学と宗教とは深いところにつながっているように私は思っています。私は何か特定の宗教の信者ではございませんが、やはり宗教というものはそういうものでなからうかという気持ちはずっと抱いておりますし、そういう意味での宗教心みたいなものを医療のなかで生かしていかなければ、本当の医療はできないんじゃないかということも常々考えております。